

# 家族と家族幻想 3

坂口 伊都



人生の岐路の一つに結婚がある。

私たちは、どのような人に心惹かれて  
いるのだろうか。

そして、どのような家族像を思い浮かべて  
いくのか。期待と不安を胸に  
人は結婚に踏み出してみる。

コロナウイルス感染者の数が減ったかと思っ  
たのも束の間、緊急事態宣言の頃よりも日々の感  
染者人数は大きくなりました。帰省、旅行を控えて  
と知事が言い、国は Go to トラベルキャンペーン  
をして、不協和音の中に立たされる私達です。人  
が移動すれば感染者は自ずと増えますが、経済を  
止めるわけにもいかない、相反することをすれば

摩擦が生まれる。そして、それぞれの立場で何  
を見ようとするかで見え方が変わります。コロナウ  
イルスはただの風邪だと主張する人々も現れ、そ  
の一方で感染防止に躍起になる人々もいます。何  
を時代が優先させていくのかで私たちの向かう未  
来が変わります。ある程度の見通しを持って一生  
が終わられるという時期は終わったのかも知れま  
せん。変遷する時代の波の中で、個々人に意思を  
持つように迫られてきている時代になり、誰もが  
途方に暮れているという感じでしょうか。感染者  
が減るような対策を取られていないので、これか  
ら増え続けるでしょう。どこで政府が手を打と  
うとするのか、その時が手遅れでないことを祈り  
ます。

気晴らしに旅行に行きたい気持ちでウズウズし  
ていますが、夫婦そろって対人援助職をしている  
身としては、感染した頃に旅行に行っていたとは  
言いにくいです。自宅のある市でも感染者は出て  
いるのですから、どこにいても感染リスクはある  
のですけど、夏もゴールデンウィーク同様、おと  
なしくしています。



が欲しいかと尋ねると、周りを見てもあまり幸せそうな人を見ないし、行動がいろいろと制限されるから優先順位は低いそうです。娘、大丈夫か？と少々不安になりますが、その内変わるのでしよう、たぶん。

結婚をするとすぐに「子どもはいつ？」という展開になり、ここでも選択を迫られます。自分たちのライフスタイルや年齢を考えながら計画的に産もうとしたり、妊娠がきっかけで結婚を決意したり、子どもを持たない、あるいは養子縁組や里子を受け入れる等の選択肢があります。子どもがいると、生活が一変します。

私も子どもを産み育てながら、働き続けてきました。子どもが小さいのに保育所に入れるなんて可哀そうと言われたこともありました。上の子と下の子と同じ保育所に入れず、朝も晩も走り回る日々で大変でした。その当時の保育所では、仕事が終わったら真っ先に迎えに来るのが当たり前、買い物なんてして来たら非難の的でした。仕事が休みなら保育所に連れて来ず家で子どもをみるものだとされ、保育所内にも母子神話が根付いていました。母親が仕事を続けることにプレッシャーがついてまわりますが、父親が家事育児をすれば称賛され、母親の方は羨ましがられ、楽しいていると思われて終わります。出産の鼻の穴からスイカを出すくらいの痛みを耐え、産んだ後も痛くて座るのも儘ならず、出産で体力を奪われているのに数時間おきに母乳を飲ませと母親ばかりに負担がかかり、夫婦の子どもなのに割が合わないと思いを恨めしく思いました。母親に育児の重責を背負わせることは、今もあまり変わっていないのでしょうか。

時代が急激に変化しているように見えますが、性別で左右される社会での役割分担はなかなか変わっていかないようです。性別は生まれ持つ性質で、物心ついたころには自分は女であり、女の子の振る舞いを暗黙の了解のもと学習していったように思います。生まれ落ちた時から、性の社

会的役割を植え付けられながら成長してきました。

誰もが自分の惹かれる人と「対」になりたいと望み、家族を作るスタート地点に結婚があるのだろう。

ペアになる理由に繁殖があるが、私たちは繁殖以外の時期も一緒に過ごしている。そこには、別の理由があり、それを求めている。

どちらの性に生まれ落ちるかは、誰にも決められません、その性を引き受けて生きることへの努力は、女性、男性の両方にあります。私は女性をしてきたので、男性の苦労はあまりわかっていないところがあると思います。結婚、家庭、進学、就職、職場と女性が不利益を強いられていると感じる場面が数多くあります。

男性と女性のペアには、生物として子孫を残すというシステムがありますが、ただ子孫を残すためだけに対になるのではなく、様々なペアがいて、繁殖以外の期間を共にしています。人間界では単純に強い雄に雌が惹かれるわけではなく、我々の暮らしに根ざす文化や思想、社会的役割等に大きな意味があり、ペアになる相手を求める際に深く関わっているとわかります。その他、経験から何かを学んだり、コンプレックスが影響したりもしているように思います。

己がどのような人に惹かれるのかを思い返すと、家族の影響があることは否定できません。以前に

原家族のワークショップで、若い頃は年上の男性に惹かれてしまうことが多かった、今思えば男性に父親像を求めていたと思うという話で盛り上がった事があります。私の場合は、このような感じの人が父親だったら良かったのに、父親のように甘えてみたいという願望がありました。惹かれる相手には理由があると言われたら、多くの方が頷くでしょう。誰かと「対」になっていくことは、家族を作っていくスタート地点でもあり、原家族の影響を受けやすい部分なのですね。

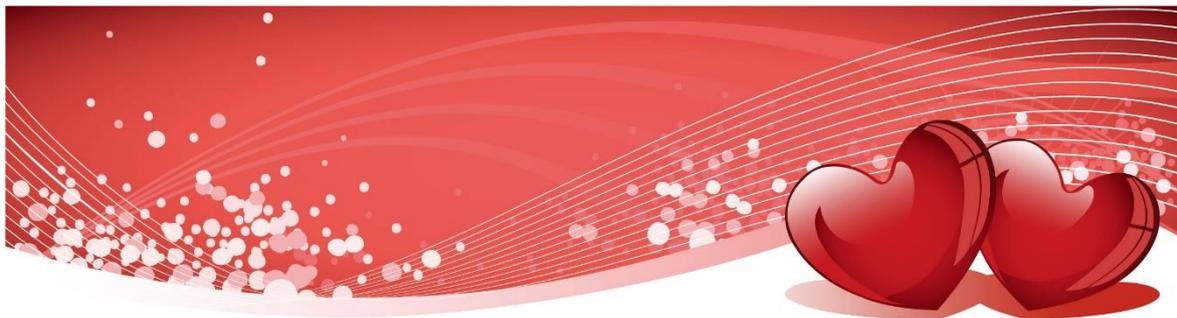
また、異性に惹かれるだけで話が済むわけではありません。同性同士、同性も異性も恋愛対象、どうしても恋愛感情を抱けないという方もいます。自身の容姿についてももともとの生物学的性と自身が認識する性が違い苦しむ人もいます。人の性が多様過ぎて、頭の中がいつも混乱してしましますが、このような多様な性は世界の歴史の中にも出てきますし、日常的にも珍しいものではないのでしょう。高校時代にしぐさや話し方が、女性っぽい男子生徒やゲイなのかなと思われる二人組がいたなと思い出します。ゲイと思われるペアには、周りからいろいろなヤジが飛んでいましたが、いつも自分たちの世界にいて楽しそうに笑っていて、羨ましく思ったことを思い出します。私も家に電話がかかってきて、女の子から告白された経験があります。同じ高校ではないと言われたので、顔もわからないままです。当時の私はショートヘアでガリガリだったので、女性として認識されていたのかどうか怪しいのですが、付き合っただけと言われた記憶が残っています。女性的なフェロモンが全く持てないまま、今に至ってしまいま

した。

恋愛関係になるためには、お互いに惹かれあうことが前提となります。両思いになっても、タイミングや状況が合わないと恋人になれないこともあります。いろいろな障害を乗り越えて恋人同士になると、自分が相手から求められ認められたと思えます。自身の存在意義を感じ、幸せな気持ちになります。その相手を失わないように型にはめるのが結婚制度でしょうか。

経験によって惹かれる要素が変わるという話をしましたが、マイナスの方向に惹かれてしまうことも儘あるようです。ドメスティックバイオレンスとされる夫妻に出会うことがあります。夫側も妻側も子ども時代から暴力を受けて育ったり、間近で暴力を見ながら育っていることが多い印象を受けます。自分の寂しさを埋めて欲しいと相手を求めるが、自分からは与えられないという印象を受けることがあります。相手を失わないように必死になるほど暴力が生活の中に入り込む。妻の方は、やっとの思いで離婚したが、寂しさに耐えられず別の男性を求める。今度こそ、この人なら大丈夫と自身に言い聞かせるが、またDVに出会う。男性も女性も自身の生き様を整理していくことをしないと同じことを繰り返してしまうように見えます。

性被害も大きく作用する経験になります。性虐待や性被害を受けると大きな傷になります。その傷を癒すためには、誰かの手助けが必要ですが、被害者なのにも関わらず、そんな服装をしている方が悪い、誘ったのはお前だ、穢らわしい等の人格否定をされ、傷を癒すどころか傷口に塩を塗ら



れる目にあうこともあります。その苦悩は計り知れません。性加害は、被害者の人生そのものに影響を与える重大な犯罪です。性被害を受け、風俗で身体を売るようになったという話を聞いたことがあります。性被害は、女性だけでなく男性にも起こり、少年が成人男性から性被害を受けることもあります。男性の風俗では、男性からの性被害者の人も働いていると言います。その人が、本当にゲイなのか、あるいはその経験に引っ張られているのかは、本人にもわかりません。

性にまつわる事柄は、深く生活や価値観、自尊心感情にも関わっています。希望にもなるし、絶望にもなる。その一方で、性にまつわることを子どもと向き合っ話そうとする機会は少ないのではないのでしょうか。昔は、性を大らかに語っていたと言います。私の子ども時代と比べても性描写が生活の中から排除されていっているのは間違いないでしょう。何が正解なのかはわかりませんが、性行動以外に結び付きたいという欲求を私たちは所持していること、それと性行動がどう結びつくのか、結びつかない場合もあるのかを語られなさすぎることは、子どもを守っていくことに繋がらないように感じます。

人は一人では生きられない。

人は、守り守られながら生きていくものではないのでしょうか。

それを子どもに伝えていくことは、とても大切なのでしょうか。

家族の原点は、誰かと対になることから始まるのだと考えると人生そのものを左右することに繋がることになります。もちろん、結婚をしない、結婚をしても離婚をする等の選択肢があり、やり直しはききます。しかし、どのような人に惹かれてしまうのかは、子ども時代から馴染んできた原家族や経験してきたことが大きく影響します。私は、相手に無意識の内に何を求めているか。そして、大人として自立できてくるのか。例えば、寂しさを紛らわせるために誰かがいつも傍にいて欲しいとばかり願うと、パートナーは姿を消し、子どもにもたれかかろうとしてしまうことが起こります。子どもも親の期待に応えようと必死になっていたり、どうしたらいいのかわからず戸惑っていたりと子どもらしさを置き去りにしているように見えます。本来、子どもは親を始めとする大人に守られ存在だということを知っていて、その中で気持ちを調整してもらい、感情を知り、どうして対応すればいいかを学べ、さらなるチャレンジをする力を発揮する力を持っています。親のために生きることを求められた子どもは、その力を上手く発揮できません。そして、自身に対する認識も低くなり、社会の中の行動が上手く回らなくなる悪循環にはまっています。

多種多様な人間がいて、価値観もそれぞれ異なることを教えるのは、大人の役割でしょう。そして、性というものをどう捉え、被害にあった時は守ってもらえる信頼を持っていける世界が、家族を肯定的に捉えられる土台になるように感じます。まずは、自分がどのような弱さを持ち、どのような偏見を持ちながら育てているのかを知ろうとすることが大切なのかなと考えています。

